

| | |
|--------------|---|
| Title | 大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻）三 |
| Author(s) | 山本，一；佐藤，明浩 |
| Citation | 語文. 1986, 47, p. 47-66 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68746 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学文学部国文学研究室蔵

後鳥羽院御集 (翻刻) 三

山本 一・佐藤 明浩

後鳥羽院御百首 (注1)

春 二十首

立春

一〇九七 春たつとおもひあへぬにのとけきはいつる朝日や空にしるらん

霞

一〇九八 をしなへてかすむやいつこあまつ空めにはさやかにみえぬ
春哉

一〇九九 和田の原行多もしらすはてもなしおきつ霞の春の明ほの

鶯

一一〇〇 野へちかく年の内より家ゐしてまつうくひすの声を聞かな
春雪 「62オ

一一〇一 風ふけはふるあは雪のそらにのみきえてみたるゝ春の夕く
れ

若菜

一一〇二 白妙に袖ふりはへてこよろぎやめさしも春といそなつむ也

梅

一一〇三 八重にたつかすみの袖はつゝめ共かくれぬ物とにほふ梅か

え

一一〇四 梅か香をしるへにはしてしり知すなにゝあやなくやとはわ
くへき

春月

一一〇五 春の夜の月のかつらもかすみつゝあたりそ匂ふ花やさくら
ん

柳

一一〇六 春風の吹くることにしろたへのいさこをはらふ青柳の糸」
62ウ

婦雁

一一〇七 行なるゝ故郷なれはかへるかりくるゝ雲ちもまよひやはす
る

春雨

一一〇八 なかき日をふりくらしたる春雨はさひしきことのかきり也
けり

花

一一〇九 松かえの千とせの後もなをあかしときはに花のさく世也せ

は

一一一〇 色まかふ雲なへたてそはなのあたり見つゝしのはんみよし

野の山

一一一一 山さくらははれさく花に物そおもふよしのゝ嵐吹そめしより

一一一二 たれかこの雪と月とにたくへけんなへてにもあらぬ花の色

香を

一一一三 つれなさや契かはしてのこりけん花ちるころのあり明の月」

63才

藤

一一一四 ささかゝるみ山の藤のこむらさきあをはの中にめつらしき

哉

款冬

一一一五 花さけはみなそこてりて足引の山ふきにはふせゝのしら波

暮春

一一一六 いつとでもおしむにとまる春はなきをしめてしたふそつれ

なかりける

夏十首

卯花

一一一七 我宿のかきねつゝきを河とみておられぬ波はさけるうの花

郭公 63才

一一一八 ほとゝきすいく声なきつ大はらやをしほの山のむら雨の空

一一一九 なきすてゝ過つる方をみせしとや雲に入ぬるほとゝきすか

な

一一二〇 白雲の道ゆきふりのほとゝきすたかことつての事かたらな

ん

夏月

一一二一 白妙のいさこの霜のをきぬつゝ月みるほとはすゝしかりけ

り

五月雨

一一二二 ほす衣くちははてしな河やしるかはせにいはふ五月雨の比

盧橘

一一二三 むら雨は花たちはなを過ぬらしつねよりことに露のしけき

は

螢 64才

一一二四 夕暮の草葉の末にとふはたる雲井にのほる影そほのめく

夕立

一一二五 なる神のご多のとをちにぬるまゝにふりすきて行夕立の雨

納涼

一一二六 山ふかきふしみの里のゆふすゝみ松のかけには夏なかりけ

り

秋二十首

初秋

一一二七 いとはやとすゝしきかせかをとめこか袖ふる山に秋たつら

しも

七夕

一一二八 七夕はおほくの秋やかさぬらん逢夜は年に一夜なれ共」64才

露

一一二九 なかめ侘て涙よりをく露になをつゆそふ袖の秋の夕くれ

萩

一一三〇 とふ人を待とせしまの日教へて下葉もみつる秋はきの花

荻

一一三一 故郷の露のやとりもあとたえてみぬ日にしける庭の荻はら

薄

一一三二 白露のをかへの薄はつをはなほのかになひく時はきにけり

秋夕

一一三三 秋はたゝ身にさむく吹風の音もなげかんためたくれの空

虫

鹿

一一三四 露しけき尾花にましり鳴虫はほにいてゝ恋や忍ひかねつる

一一三五 秋ふかきとこのよさむにね覚して鹿のね聞そさひしかりける

初雁

一一三六 秋風のさむき朝けにきにけらし雲にきこゆる初かりの声

月

一一三七 あき風は尾上の松にをとつれて夕の山をいつる月かけ

一一三八 いとゝなを月すめとの嵐かなのこる雲なきあきの大空

一一三九 なかめつゝ人たのめなる秋の夜の月のひかりにいこそねられね」65ウ

一一四〇 さらしなやはすて山もさもあらはあれたゝ我宿の雲の上

の月

一一四一 よこ雲のあくる外山をよそにみて月はよふかき物の空哉

掃衣

一一四二 今よりは衣うつなり秋かせのさむき夕のをかのへのさと

一一四三 誰ならんさきにたつこまの音はして霧にこめたる勢多の長

はし

一一四四 なかれ行末はとまらずたつた川もみちのかけをあらふ白波

紅葉

一一四五 しくるらし紅葉の錦しきしまの山とりの尾のなか月の空

九月辰」66才

一一四六 暁のかねまつ程のうきのまを秋とおもふそかなしかりける

冬十首

一一四七 冬といへはいつしか野へも霜かれてのこる物とは白菊の花

初冬

一一四八 嶺ちかきいり日の空のしくるれは紅葉を松の木末にそかる

時雨

一一四九 竜田川よもの木の葉のしくれの雨まなくしふれと水はまさ

落葉

らす

一一五〇 なかめわひぬふかき霜夜のあけかたは月もむなしきかきり

冬月

一一五一 あらし吹ならのひろ葉の冬枯にたまらぬ玉はあられ也けり

霰

一一五二 いとゝまた冬こもりせるみよしのゝ芳野のおくの雪のふる

雪

一一五三 こほりつる此ゆふくれの雲ならし暁かけてふれるしらゆき

里

一一五四 かきくらし降つる雪のはるゝ夜に千里をみせてみかく月か
け

千鳥

一一五五 さえ／＼浦かせしきる冬の夜のなみのさはきに千鳥なく
也

歳暮

一一五六 むかしへと成行としのおしきこそ花紅葉にも猶まさりけれ」
67才

恋二十首

初恋

一一五七 いひ出んことの葉もなをしのはれて心にこむる我思ひかな

忍恋

一一五八 あらはれん物ゆへやかてわすれしとうたかふかたにしのふ
とし月

一一五九 心より又はもらさむわかぬイこひをなみたはしりて年ふりにけ
り

不逢恋

一一六〇 としふれとかはらぬ物はあはてのみつれなき中のなみた也
けり

一一六一 つれなきをいのる心の末つゝにあふ夜ありやと君そしるへ
き

一一六二 侘ぬれは又そ恋しきつれもなき人をねたしと思ひすつれと」
67ウ

一一六三 恋しなん命のうちに逢といふなき名をたにもたつときかは
や

一一六四 よしさらは今そこひしとちかひしも身さへ心にえこそまか
せね

待恋

一一六五 いつはりにならんゆふへの我いのちあすまでありといかゝ
きかれん

一一六六 こりす待契りの末のいかならんつらきになれし夕暮の空

初逢恋

一一六七 限あれは今そかさぬるせきかへし涙にくちし夜半の衣手

暁別恋

一一六八 さもあらはつれなきはかりならひきて月につらさの有明の
空

逢不逢恋」68才

一一六九 いかにせんかさねし袖のうつり香も月日つもれはうすくな
りゆく

一一七〇 つれなしと恋うれし世はむかしにて心よ敷うはさの身をそうら
むる

一一七一 くやくしくそ有し別れをかきり共しらて出けん衣／＼の空

忘恋

一一七二 契をきてわすれし人の面影はつらき物から恋しかりけり

一一七三 かれぬやと待し月日にわすれ草しけりのみして霜はむすは
ん

一一七四 はかなくそ一夜二夜のかれをも身にならはずとむかしう
らみし

恨恋

一一七五 わかるゝは世のならひとゆるしてんうつるにつらきひく

てあまたに

一一七六 波たかき入江の小舟こきかへりうらみて袖のぬれにける

哉」68ウ

雑 二十首

暁

一一七七 寢覚するあかつきはかり世の中にこゝろすむ時は人もあら

しな

松

一一七八 人ならばとはまし物を谷ふかみ昔むす松のむかしかたりを

竹

一一七九 おなしくはやを方代をゆつりなん我九重のにはのくれ竹

山

一一八〇 春は花秋はもみちのから錦たつたの山の名にこそ有けれ

河」69オ

一一八一 大井河せゝのみゆきもかさなりてふかきなかれに成にける

かな

橋

一一八二 宇治橋の末をはるかに見たせは雲にきえ行あけほの空

関

一一八三 会坂やのこりの月の関の戸を鳥の音きゝてこゆるたひ人

旅

一一八四 駒なむる袖まで露はかゝりけりはらはぬ草の野辺の夕くれ

一一八五 旅ねして故郷おもふ床の上にする時雨の音のかなしき

山家

一一八六 おとろかてなれぬる程もあはれもなくさをしかの庭の草ふ

し」69ウ(注2)

此間奥ニアリ

一一八七 あらしたに露はらはなんとふ人もなき山かけのこけのまか

きに

田家

一一八八 いほむすふいな葉の□も立みちて国と民とはさかへゆかな

ん

述懐

一一八九 住吉の神もあはれとまもらん心にかゝる秋けのうらなみ

一一九〇 人としていかにか世にもありふへき五の常の道はなれては

夢

一一九一 いかにしていにしへ今の見えつらん夢のたゝちはまたさと

りえず

神祇

一一九二 神風やいほすゝの川いまもかも清きなかれをたのむ我な

り」70オ

尺教

一一九三 さとるへきそのみなもととはひとつにてさまくにとく道や

かはれる

祝

一一九四 松といへはいく千とせともしらなくにかはらぬ色のあかす

も有哉

一一九五 天津空はれたるあさになくたつの行すゑとをき声ものどけ

し

(一行分空白)

種子贈石大臣信隆女後鳥羽御母

七条院けふあすとも知ぬ身にいかゝしていま一度見ま
いらすへきと御ふみありけるを御覽して

一一九六 たちちめのきえやらて待露の身を風よりさきにいかてとは
まし」70ウ

家隆卿和歌はむかしよりの面影かすゝにうかひてつ
らき命にけふにあひぬるとのみおもひわたるおりゝ
ふてにまかせてかきたるよし申侍 へねさめしてきか
ぬをきゝてかなしきはあらひそ波のあか月のこゑなと
廿はかりかきあつめて寂仏かもとへたよりにつけたり
けるを御覽して」71オ

一一九七 波間なきおきのこしまの浜ひさし久しくなりぬ都へたてゝ
一一九八 あぎといへは人のおもひにくもはれて月のかつらもおり忘
れつゝ

一一九九 おもひやりてあはれともみよこれその涙の川の水くきの
すゑ

一二〇〇 かせさむみあさのさ衣うつたへにかきねつゝきのね覺にそ
聞

一二〇一 いたつらに月もなかもす物思ひの涙のうちに秋はくれにき
一二〇二 木枯のおきのそま山ふきしほりあらすしほれて物思ふ比
一二〇三 日にそへて涙そいとゝますかゝみかけたに見ねは身もわす
れつゝ

一二〇四 吹きはるたえまゝにきこゆなりいりあひの鐘をうつむ山
かせ

一二〇五 ふしわふる竹のすかきのなかき夜にしほるたもとのかすそ

しられぬ

一二〇六 とまる名もなにかはおしき思ひ河なかるゝ水のあはれ世の
中」71ウ

一二〇七 水無瀬川さとの木末をかへりみてなくゝ過し空はわすれ
ぬ

一二〇八 めくりあふ春もやあると故郷の軒端のさくら色なわすれそ
(八行分空白) 72オ

百首和歌

春 二十首

一二〇九 かすみゆくたかねを出るあさ日影さすかに春の色をみる哉
一二一〇 すみそめのそての水に春たちてありしにもあらぬなかめを
そする

一二一一 とけにけりもみちをとちし山川の又水くゝる春のくれなる
一二一二 百ちとりさえつる空はかはらねとわか身の春そあらたまり
ぬる

一二一三 里人のすそ野の雪をふみ分けてたゝわかためと若菜をそつ
む

一二一四 ふる雪に野守か庵もあれはてゝ若菜つまんとたれにとはま
し

一二一五 根芹つむ野沢の水のうす氷またうちとけぬ春風そふく
一二一六 かきりあれはかきねの草も春にあひぬつれなきものは苦ふ
かきそて」72ウ

一二一七 春雨に山田のくろをゆく賤の蓑ふきみたす暮そさひしき
一二一八 遠山路いくへもかすめさらすとてをちかた人のとふもなけ

れは

一一二九 うらやましなき日影の春にあひて伊勢をのあまも袖やは
すらん

一一三〇 萌いつる峯のさわらひ雪きえておりすきにける春そしらる
ゝ

一一三一 をのれのみ春にあふかとおもふにも嶺のさくらのいろそも
のうき

一一三二 なかむれは月やほありし月ならぬやあらぬイうき身そとの春にかは
れる

一一三三 なかむれはいとゝうらみもますけおふる岡辺の小田をかへ
す夕暮

一一三四 春雨も花のとたえそ袖にもるさくらつゝきの山のした道

一一三五 宿からむ交野のみのゝかり衣日もゆふくれの花の夕かせ

一一三六 すみそめの袖もあやなくにはふ哉花ふきみたす春の夕風」
73オ

一一三七 ちる花に瀬々の岩まやせかるらんさくらにいつる春の山河

一一三八 物おもふにすくる月日はしらねとも春やくれぬる峯の山ふ
き

夏 十五首

一一三九 けふとてや大官人のかへつらんむかしかたりの夏ころも哉
一一四〇 ふるさとをしのふの軒に風すきて昔のたもとににはふ橋
一一三一 たをやめの袖うちほらふむら雨にとるやさなへの声もなら
はす
一一三二 くれかゝる山田のさなへ雨すきてとりあへすなく郭公かな
一一三三 あやめふく萱か軒はに風すきてしとろにおつるむら雨の露

一一三四 五月雨に池の汀やまさるらん蓮のうき葉をこゆるしら浪

一一三五 さみたれに宮木もいまやくたすらん松たつ峯にかゝるむら
雲」73ウ

一一三六 難波江やあまのたく繩もえ侘てけふりにしめる五月雨の比
一一三七 したくゆるむかひの森の蚊遣火におもひもえそひゆく螢か
な

一一三八 あはれにもほのかにたゞく水鶏かな老のねさめのあかつき
の空

一一三九 ゆふたちのはれ行峯の雲まより入日すゝしき露の玉さゝ
一一四〇 夕すゝみ芦の葉みたれよる浪にはたるかすそふあまのいさ
り火

一一四一 くれ竹の葉末かたよりふる雨にあつさひまあるみな月の比

一一四二 見るからにかたへすゝしき夏ころも日も夕露のやまとなて
しこ

一一四三 いまはとてそむきはてつる世中を何とかたらふ山ほとゝき
す

秋 二十首

一一四四 かたしきの苺の衣のうすければ朝けの風も袖にたまらず」
74オ

一一四五 よのつねの草葉の露にしほれつゝものおもふ秋とたれかい
ひけん

一一四六 おもひやれ真柴のとほそをし明てひとりなかなる秋のゆふ
へを

一一四七 秋されはいとゝ思ひをましはかるこのさと人もそてや露け
き

一二四八 さきかゝる山下みちもまよふまで玉ぬきみたる萩のあざつ

ゆ

一二四九 故郷を別路に生る葛の葉の風はふけともかへるよもなし

一二五〇 いかにせん葛はふ松の時のまもうらみてふかぬ秋風そなき

一二五一 なきまさるわかंनाみたにやいろかはるものおもふやとの庭

のむらほき

一二五二 軒はあれてたれかみなせのやとの月すみこしまゝの色はか

はらす

一二五三 おもひやれいとゝなみたもふる郷のあれたる庭の秋のしら

露

一二五四 野辺そむる雁のなみたは色もなしものおもふ露のおきの里

には」74ウ

一二五五 ふるさとの一むらすゝきいかはかりしけき野はらと虫のな

くらん

一二五六 あはれなりたかつらさとて初かりのねさめの床になみたそ

ふらん

一二五七 はれよかしうき名を我にわきも子かかつらき山のみねのあ

さ霧

一二五八 岡の辺の木のままに見ゆる楨の戸にたえ／＼かゝる葛のあき

かせ

一二五九 おなしくは桐の落葉もふりしけよはらふ人なき秋のまかき

に

一二六〇 ぬれてはず山路の菊もあるものをこけのころもはかはくま

そなき

一二六一 たのみこし人のこゝろは秋ふけて蓬かそまにうつらなくな

り
一二六二 山もとのさとのしるへのうすもみちよそにもおしき夕あら

しかな

一二六三 よもすからなくや浅茅のきり／＼すはかなくくるゝ秋をう

らみて

冬 十五首」75オ

一二六四 見し世にもあらぬたもとを哀とやをのれしほれてとふ時雨

哉

一二六五 冬くれは庭のよもきも下もえてかれ葉のうへに月そさひゆ

く

一二六六 霜かれの尾花ふみ分ゆく鹿のこゑこそきかねあとはみえけ

り

一二六七 神無月しくれとひわけゆくかりのつはさふきはす嶺の木か

らし

一二六八 をのつからとふかほなりし萩の葉もかれ／＼にふく風のさ

むけさ

一二六九 去年よりは庭の紅葉のふかきかなみたやいとゝしくれそ

ふらん

一二七〇 青むとてうらみし山もほともなく又霜かれの風おろすなり

一二七一 竜田川まかふ木のはのゆかりとてゆふつけ鳥に木からしの

風

一二七二 ちりしけるにしきはこれもたえぬへしもみちふみわけかへ

る山人

一二七三 冬こもりさひしさおもふあさな／＼つま木のみちをうつむ

白雪」75ウ

二七四 山かせのつもればやかてふきたてゝふれとたまらぬ嶺の白雪

二七五 さなからやほとけの花のおらせまししきみのえたにつもる白雪

白雪

二七六 かそふれはことしの暮はしらるれと雪かくほとこのいとなみもなし

雑三十首

二七七 いにしへのちきりもむなし。よしや我かたそきの神とたのめと

二七八 なましひにいければうれし露の命あらは逢世をまつとなけれど

二七九 とへかしな雲のうへよりこし雁のひとり友なき浦になく音を

二八〇 もしほやく海士のたく繩打はへてくるしとたにもいふかたそなき

二八一 かめめなく入江のしほやみつなへに声のうき葉をあらふ白波

二八二 浪まわけおきの湊に入船のわれそこかるゝたえぬ思ひに

二八三 汐風にこゝろもいとゝみたれ声のほに出てなけととふ人もなし

二八四 里とをききねか神楽の声すみてをのれと更る窓のともし火

二八五 とはるゝもうれしくもなしこの海をわたらぬ人のなけのなさは

76オ

かき
二八七 あかつきの夢をはかなみまとろめはいやはかなゝる松かせ

そ吹
二八八 とにかくにつらきは沖の島つ鳥うきをはなれる名にやこたへん

二八九 すきにけるとし月さへそうらめしきいましもかゝるもの思ふ身は

二九〇 夕月夜入江にしほやみちぬらんあしのうき葉のたつのもろ声

二九一 沖のうみをひとりやきつるさよ千鳥なく音にまかふ磯の松風

二九二 日にそへてしけりそまさる青つゝらくる人もなきまきの板戸に

二九三 なにとなきむかしかたりに袖ぬれてひとりぬるよもつらき鐘哉

二九四 人こゝろうしともいはしむかしより車をくたくみちにたとへき

二九五 みほのうらを月とともにや出つらんおきの外山にふくるかりかね

二九六 よそふへきむろの八島もとをければおもひのけふりいかてまかへん

二九七 はれやらぬ身のうき雲をいとふまにわかよの月のかけそふけぬる

二九八 うしとたに岩波たかきよし野河よしや世中おもひすてゝき

二九九 ことつてんみやこまでもしさをはらはあなしの風にまかふ

むら雲

一三〇〇 とにかくに人のこころのみえはてぬらぎや野守のかゝみなるらん

一三〇一 おもふ人まつもこころのなくさむとみやこ鳥たにあらはとはまし

一三〇二 ふるさとに昔の岩はしいかはかりをのれあれても恋わたるらん」 77オ

一三〇三 われこそは新島守よおきの海のあらきなみかせ心してふけ

一三〇四 かきりあれはかやか軒はの月もみつしらぬは人の行末の空

一三〇五 おなし世に又住の江の月やみん今こそよその沖津島もり

一三〇六 なひかすは又やは神にたむくへきおもへはかなし和歌のうら浪

一三〇七 とへかした大みや人のなさけあらはさすかに玉のたえもやらぬを
(五行分空白) 77ウ
(裏表紙見返シ左上ニ「読合畢」、左下ニ貼紙「墨付七十枚」)

後鳥羽御集 下 (題簽)

(遊紙一枚)

老若五十首御歌合 建仁元年 二月

建仁元年九月五十首御会

元久元年十二月八幡三十首御会

同月賀茂上社卅首御会

賀茂下社卅首御会

同月住吉卅首御会

同二年三月日吉卅首御会

承元二年二月内宮卅首御会

同外宮卅首御会

最勝四天王院御障子和歌 承元元年 1オ

建曆二年十二月二十首御会 五人百首

正治二年七月北面御歌合 三首

同七月十八日御歌合 三首

同八月朔日新宮御歌合 三首

同九月御歌合 十首

同九月尽日御歌合 三首当座

同十月一日御歌合 三首当座

同日御歌会 二首当座

同十一月十一日新宮御歌合 五首当座

同十月七日新宮御歌合 三首」 1ウ

同十一月八日影供御歌合 三首

同十一月廿九日御幸住吉社三首御熊野詣次

同十二月御歌合 三首

建仁元年正月十八日影供御歌合 三首

同三月十八日影供御歌合 六首

同三月尽日新宮撰歌合 十首

同四月廿六日御会 一首鳥羽殿初度

同四月晦日影供御歌合 三首

同日当座御会 二首

同五月日城南寺御歌合 三首」 2オ

- 同七月廿七日当座御会一首和歌所
- 同八月三日影供御歌合六首和歌所初度
- 同月十五夜撰歌合九首
- 同夜当座御会 和歌九品三首
- 同十二月二日影供御歌合三首隱名
- 同十二月廿八日石清水社御歌合三首
- 同二年正月十三日御会三首和歌所
- 同二月十日影供御歌合三首
- 同三月廿二日三昧和歌六首
- 同三月同日当座御会四首」2才
- 同五月影供御歌合三首
- 同六月水無瀬釣殿御歌合六首
- 同八月十五夜三首
- 同八月廿日影供御歌合三首
- 同九月廿九日恋十五首撰歌合
- 同九月十三夜御会三首当座
- 同夜当座御会二首折句十三夜
隠題水無瀬川
- 同三年正月十五日御会一首高陽院殿
- 同六月十六日影供御歌合三首
- 同六月十六日影供之次二首」3才
- 同七月五日八幡宮撰歌合六首
- 同八月十五夜和歌所当座五首
- 同十一月釈阿九十賀御会同屏風御歌十三首
- 同月日六首和歌所
- 元久元年七月十六日御会五首字治
御幸

- 同八月十五夜御会五首五辻殿
初度
- 同夜当座御会一首
- 同十月石清水御歌合三首当座
- 北野社歌合之由被注付尤不審
- 同十月日当座御歌合三首
- 同十一月十三日春日社御歌合三首」3才
- 新古今竟宴和歌一首元久二年三月
廿六日
- 同七月十八日北野御歌合三首折雨当日出題
撰政判有序
- 建永元年正月十一日御会一首高陽院
- 同七月廿五日卿相待臣御歌合三首
- 同日当座御歌合三首
- 同月中後日当座御歌合三首
- 同月中当座御歌合三首
- 同八月五日鳥羽院新御所初度一首
- 同八月御歌合式御会三首
- 承元々年正月廿二日御会一首和歌所」4才
- 同三月七日鴨社御歌合三首
- 同日賀茂社御歌合三首
- 同二年三月住吉御歌合三首
- 同閏四月四日三首
- 同四年八月十一日一首
- 同九月粟田宮御歌合三首
- 建曆二年二月廿五日於紫宸殿花下三首
- 同三年七月十七日松尾社御歌合三首無判
- 建保元年十二月十四日御会五首水無瀬殿
当座
- 同二年二月御会三首」4才

同八月撰歌合十首

同九月三日当座二首

同九月十四日一首

同三年六月二日御歌合五首

同四年八月廿日五首御熊野詣路次

当座和歌湯淺宿

同十月十一日庚申嵯峨殿一首

同五年四月十四日庚申御会五首

同七年三月八日御会一首水無瀬殿

撰歌合十番嘉禄二年四月廿一日家隆卿賜之

建仁元年九月十三夜影供御歌合三首

詩歌合一首

嘉禎二年七月遠島御歌合十首

建仁元年十月熊野御幸所々御歌十八首

熊野路次御歌合三首

正治二年十一月八日影供御歌合一首

贈答御歌六首

題不知御歌卅一首

(二行分空白) 5ウ

後鳥羽院御家集下

建仁元年二月老若五十首御歌合十六十八兩日有評定被付勝負

春

一三〇八 春は今冬をこめてやたらぬらん霞にもるゝみねのまつ風

一三〇九 朝霞たてる山辺そなをさゆる木のめも春の雪はふりつゝ

一三二〇 わたの原遠の霞のはるのいろに波イ八十島かけてかへる雁金

一三二一 武蔵野のきよすよいかにかや思ふ煙のやみにこゑまよふ也

一三二二 都人新秋古そこともいはすうちむれて花にやとかるしかの夕暮

一三二三 花匂ふかすみの空をなかむれはおほろけならぬ春のみか月

一三二四 あた後撰ら夜のまやのまやのあまりに詠れば桜にくもる有明の

月統子 6オ

一三二五 花ゆへにしかの故郷けふみればむかしをかけてはるかせそ

吹 一三二六 分てこの吉野のはなのおしきかはなへてそつらき春の山風

一三二七 おもふとも明なん空はいかゝせん夜のまはおしめ春つくる

かね

夏

一三二八 み渡せは名残はしはしかすめとも春にはあらぬけさの明は

の

一三二九 久方の月のかつらにあふひ草かけてそたのむかもの川なみ

一三三〇 郭公くもるこよひのむら雨にまたしき声やよにふりぬらん

一三三一 あやめ草岩かき沼のねをたえすけふは袂のにはひとそなる

一三三二 時鳥軒のたち花にほふかにえや忍はれぬをちかへる声

一三三三 郭公おもひもわかぬ一こゑにあげぬるかたはしのゝめの

月 6ウ

一三三四 夏の月しはしみるまもあらはこそくもらはくもれ山のはの

空

一三三五 時鳥雲のはつかにきこゆなりよとのわたりのむらさめの空

一三三六 秋ちかきしつかかきねの草むらに何ともしらぬ虫の声哉

一三三七 夏もまたをしまかいそのち枕うきねの波に秋かせせ立

秋

一三三八 秋立てけふみかの原かせさむしやゝたなはたにころもかせ

山

一三三九 萩の葉にあきかせ吹ぬともすれはかはらぬ月の影そすゝし

き

一三三〇 秋風は身にしむ物とおきの葉に吹よりこそはならひそめし

か

一三三一 住吉の松にあきかせ小夜ふけてうらよりをちに月そさやけ

き

一三三二 おきの葉にをく白露の玉ゆらも聞しのふへき秋のかせか

は「7オ

一三三三 秋の色はまた一しほの紅葉はに心してふけ山おろしのかせ

一三三四 あきやとき時雨やをそき三室山染ぬこすゑにあらし吹也

一三三五 くれて行秋の名残はおほあらしの森のこすゑに有明の月

一三三六 長月や秋の末葉に霜をけはのはらの小萩かれまくもおし

一三三七 尋みよいかなるせきの関守かつれなくるゝ秋をとゝむる

冬

一三三八 津の國のこやもあらはに霜かれて八へふく軒にしくれふる

也

一三三九 此比はさ夜の時雨もきゝわかす木のはになるゝみ山への里

一三四〇 冬に猶かさねて空のかせさえて時雨にかはるみねのしら雪

一三四一 ときはなる松のみとりを吹かねてむなしき枝にかへる木か

らし「7ウ

一三四二 見わたせは浪こす山のすゑの松こすゑにやとる冬の夜の月

一三四三 から崎や水に浪のをとたえてみきはに残るさ夜の松風

一三四四 高さこのまつふく風そむもれゆく尾上の雪やふりまさるら

ん

一三四五 すまのうらにことそともなき煙かな雪のあしたのあまのも

しほ火

一三四六 冬ふかみとやまのあらしさえ／＼てすそのゝまさき霰降也

一三四七 西のうみのあら磯浪による竹の一夜になりぬ冬の日影も

雑

一三四八 心をあまてる神にかけまくもかしこき光くもりなき世に

一三四九 淡路島ふきかふすまのうら風に行くよのちとり声かよふら

ん

一三五〇 おしめともつれなくあけぬ夜はの月名残を山のはには残し

て「8オ

一三五一 とひもこぬ人の心を三輪の山しるしの杉の名こそおしけれ

一三五二 なかむれは松の木影にほの／＼とあくるもつらきうら島の

月

一三五三 浜ひさし浪のまに／＼なかむれはみゆるこしまに有明の月

一三五四 呉竹のふしもさためすねもいらす鳥のなくまで月をこそみ

れ

一三五五 事とはんたれかはこゝに角田川名にしおふ鳥はありやなし

やと

一三五六 宮古人さひしき宿のまつかせに月をはみるかたとたにとへか

し

一三五七 住吉の松はいく世と事とへは岸うつ浪を磯にこたふる

(二行分空白)

建仁元年九月五十首御会

初春待花「8ウ

一三五八 雪きえてけふよりはるをみよしのゝ山も霞て花をまちける

山路尋花

一三五九 雲かゝる木末を花とたとりきてまたころあさきしかの山越

山花未遍

一三六〇 大方のはなかまたしき嶺の月のはれゆく空に残る白雲

朝見花

一三六一 明わたる山路の花のほしもあへす朝露ながら春かせそふく

遠村花

一三六二 桜さく野辺の春かせかほるなりいさ見にゆかんをちの里人(墨迹)

故郷花」9才

一三六三 さき残る吉野の宮のはなをみて春やむかしと誰うらむらん

田家花

一三六四 庵むすふ春の山田も時しあればははしろ水に花をまかせて

古寺花

一三六五 はつせ山々たちはなれちる花をゆくゑさためすさそふ風哉

花似雪

一三六六 古郷はよしのゝかせやかよふらん桜の雪もふらぬ日はなし

河辺花

一三六七 芳野川あせきに花をせきとめて水の心も春をみせけるのこせるイ

深山花」9ウ

一三六八 あたら夜の吉野のおくにひとりたれ月と花との哀しるらん

暮春花

一三六九 みよしのやなげの桜を頼にてしをりもしらぬ山の夕くれ

古溪花

一三七〇 咲てちるおもひなしとも如何せん谷にも花のよそならはこ

そ

関路花

一三七一 ふはの山かせもたイとまらぬ関の屋をもるとはなしにさける花

哉

躑中花

一三七二 旅衣きさらぎやよひ日敷へて花に馴たる袖のうへかな

湖上花」10才

一三七三 春かせのにはてるおきをふくからに桜をよするくるイしかのうら

浪

橋下花

一三七四 岩はしの神をたのむのかりなれや桜をわけてよると鳴也

花下送日

一三七五 花のかげの旅ねのあらしよころへて月にイそなれ行袖の手枕

庭上落花

一三七六 かりにたに人こそとはね故郷のさくらはゆきと庭にしけと

も

暮春惜花

一三七七 いたつらに春くれにけり花のいろの移をもイおしむなめせし

まに

初秋月」10ウ

一三七八 秋のきて露またなれぬ萩のはにやかてもやとる夕つくよ哉

月前草花

一三七九 月影を我身ひとつとなかむれば千々にくたくる萩の上露

雨後月

一三八〇 夜半になくかりの涙に雨すきて月にうつろふ野への色哉

松間月

一三八一 ほんのくと心つくしにもる月をなをふきしほる庭の松かせ

山家月

一三八二 山かけや秋ははらはぬ庭の面の桐の落葉にすめるよの月

月前竹風11才

一三八三 古里の月吹かせになよ竹のなよりあひてもいく夜経ぬらん

野径月

一三八四 わするなよ月にいく野と道すから袖になれたる女郎花哉ぬイ

沢辺月

一三八五 くもりなき沢辺こしイ野沢イのあしの埋水やしもなれぬ月の影哉

月前聞雁

一三八六 をのかくる嶺の夕きりはれはてよ月にかすしる初雁の声

浦辺月

一三八七 あけぬへきよをしほかまの恨わひからくも月のたけにける

哉

月照滝水11ウ

一三八八 ぬきみたる滝の白糸くりはへてよるともみせぬ月の影哉

杜間月

一三八九 月残る生田の森に秋ふけて夜さむの衣夜半にうつせ

月前秋風

一三九〇 たかためとわきてはふかぬ秋かせも月みる袖の露をとひく

る

江上月

一三九一 みしま江のいりえのあしのしたみたれみたれても猶月はす

みけり

月前虫

一三九二 新古あきふけぬなけや霜夜の垂やかけさひしよもきふの月

月前聞雁12才

一三九三 ね覚のみすゝのしのやに聞ゆ也月につまとふ小男鹿のこゑ

旅泊月

一三九四 船とむるむしあけの秋のはつかせにわすれかたくもすめる

月哉

月前草花露イ

一三九五 夕露にやとして月をみや木野の小萩か風よ心してふけ

菊籬月

一三九六 白きくもうつろはんとのわさなれや霜の笹の有明の月

暮秋暁月

一三九七 秋もいなは恋しかるへきこよひかなたのめかをきし有明の

月

寄雲恋12ウ

一三九八 我恋は嵐にまよふ空の雲うきてそこともなき世也けり

寄風恋

一三九九 我袖に露はもとよりをきけるをあらはすあきの風の音哉

寄雨恋

一四〇〇 こぬ人を月に待てもなくさみきいふせきよひの雨そよき哉ぬイ

寄草恋

一四〇一 袖統古にをく露の向後をたつぬればあはてこし夜の道のさよ原

寄木恋

一四〇二 人心秋の木葉とうつろへはかはらぬまつのかせのをとかなとイ

寄鳥恋13才

一四〇三 しはしこそあけぬるかとも恨しかまたはそ今はしきのはね
かき

寄嵐恋

一四〇四 忘れてはねぬへきものを何と又誰まつかせのあらくふくらん

寄船恋

一四〇五 わたのほら跡なき波のふなひとまたよりの風はありとこそ
練吉
きけ

寄琴恋

一四〇六 かす／＼に思ひし事はねにたてしかよふ松かせはいかに吹
とも

寄衣恋

一四〇七 から衣きしもせぬ夜のなかめこそ扱もわすれぬ妻と成けれ
（二行分空白） 一三ウ

元久元年十二月八幡卅首御会

春

一四〇八 ははた山みねのかすみのうちなひき春にもなりぬ明ほの
空

一四〇九 霞たち木のめ春風ふくからに消あへぬ雪に花そうつろふ

一四一〇 うちなひき春やたつらん吉野山やまもかすめるかせの音哉

一四一一 難波かたあし火たくやの春のそらくゆる煙にたつ霞かな

一四一二 春ふかみ花に山風ふくまゝに吉野ままつにかゝる白雲

夏

一四一三 とはれてや春もくれなん御芳野のはなちる庭の有明の月

一四一四 春くれて一夜ふしみの明ほのにはつせ山の夏をみるか
な 一四ナ

一四一五 我宿の軒の梢に夏はきてもりえぬ月の影そさひしき

一四一六 郭公こゑのよすかとなるものはなきつる雲のむら雨の空

一四一七 村雨のつゆの名残をならのはに残。てみかく夏のよの月

一四一八 夕たちのまたはれやらぬ山のはにをのれさやけくとふ螢哉

一四一九 かせのをとも立田のもりになく蟬の羽にをく露も秋を待ら
し

秋

一四二〇 秋はきの上はつれなくをく露にやとれる月のかけそうつろ
ふ

一四二一 さをしかの涙はみえぬ夕まくれほしえぬ袖の露をからなん

一四二二 とまをあらみ露そたもとにをきあつゝかりほの廬も月をみ
し哉

一四二三 たれみよと露のそむらんたかまとの尾上の宮の秋はきのは
な 一四ウ

一四二四 露のをくとしてこそぬるゝ袖のうへをあやしと月を影やとす
らん

一四二五 かねの音にけふもくれぬとなかむればあらぬ露散袖の秋風

冬

一四二六 神無月もみちになりぬ立田山三室の時雨日数ふるらし

一四二七 冬はまたあさちかうへにふる霜の雪とそまかふ明方のそら
かとイ

一四二八 木の葉しく山下水の薄氷ひとへにあきをむすふ也けり

一四二九 網代木にいさよふ浪やこほるらん千とり吹よるうちの川風

一四三〇 冬さむみよし野の雪のさえ／＼てくもるも知ぬ山のはの月

一四三一 とをさかり波も音せずさよふけてこほりをわたるしかの山
るイ

風

雑 15才

- 一四三三 から衣袖しくうらのかちまくら枕の波に千鳥をそ聞
- 一四三三 たひの月清見か浦にやとからん浪の関守うちもねなゝん
- 一四三四 都たにさそなきひしき松のかせひとりみ山にたれ忍ふらん
- 一四三五 すきゝつる旅の哀をかすゝにいかて都の人とたたらん
- 一四三六 草枕もとより露はをく物をあらぬすちにや月もすむらん
- 一四三七 いはし水きよき心をみねの月てらさはうれしわかか浦風

(一行分空白)

同月賀茂上社三十首御会

春六首

- 一四三八 賀茂山のふもとのし^はの春かせに御手洗河の氷とくらし^{15ウ}
- 一四三九 二見かた春のしはやのよはの月煙いとへはかすむ空かな
- 一四四〇 たてなから三世の仏にたてまつる花かもおるな春の山人
- 一四四一 さとはあれぬしかの桜の木のもとに昔かたりの春風を吹
- 一四四二 いそのかみふるの山への山おろしくへの春のはなさそひきぬ
- 一四四三 花ちりぬ石ゐの水のしゐてなを春をとゝめよしかの山かせ

夏六首

- 一四四四 郭公をのか五月を松のかせふくかときけはむらさめのごゑ
- 一四四五 時鳥まつ夜なからうたゝねに夢ともわかぬ明かたの声
- 一四四六 なかむれは横の木のまに月さえてみ山はまたき秋かせそ吹
- 一四四七 夏ふかみ月まつよはの山のはに光をならす庭のいな妻^{16オ}
- 一四四八 夏ふかみ木たかき松の夕すゝみ梢にこもるあぎの一声
- 一四四九 夏と秋と行かふ夜はの浪の音のかたへすゝしきかもの河風

秋六首

- 一四五〇 心すむためし也けり千早振かもの川原のあぎの夕くれ
- 一四五一 羽にかくるとこよの雲やくる雁の都の月のくまと成らん
- 一四五二 野原より露のゆかりをたつね来て我衣手に秋かせそふく^{新古}
- 一四五三 すゝむしのごゑ古郷のあざちふによすからやとる秋の月哉
- 一四五四 秋かせも身にさむしとや蕪くるゝ夜ことに声うらむらん
- 一四五五 今こんとたのめし庭に露さむし有明方の長月の月

冬六首^{16ウ}

- 一四五六 吹まよふ木の葉にいろや残らん昨日くれにし杜の秋風
- 一四五七 紅葉はも今はあらしの日影へてみ山あらはに冬は来にけり
- 一四五八 おりくふる柴の煙の絶ゝに麓の風にむすほゝれゆく
- 一四五九 庭の雪もふみ分かたく成ぬ也さらても人を待となけれと
- 一四六〇 さゝのはゝみ山もさやに置霜のこはれるにさへ月はすみけり
- 一四六一 宮ご人とはて月日は杉のはに雪のみふかきをのゝ山もと

雑六首

- 一四六二 賀茂山や山吹かせはのとかにて神のちかひもたのものよ
- 一四六三 都にはたゝくもらすと月はみるとすましやまぎの木の間も
- 一四六四 山里はみねの嵐にねさめして思へはそてにし^ゆのゝめ^{17オ}のつ
- 一四六五 海山もたひの枕のねさめには松風よりそ袖はぬれける
- 一四六六 山寺のけふもくれぬのかねの音に涙うちそふ袖のかたしき
- 一四六七 みたらしや神のちかひを聞おりそなをたのみある此世也け

る

(一行分空白)

賀茂下社三十首御会

春六首

一四六八 神ふくはつ春かせにさをはれて千世をこめたるうくひすの
声

一四六九 春のきておろすあらしはさゆれ共霞そいそくあまのかく山

一四七〇 芳野山春たつみねのかすみより今年ははなとふれる白雪

一四七一 故郷の春やむかしの軒はより月にかほれる梅のはつ花¹⁷ッ

一四七二 春のきてあけゆく山のむら霞おほるにのころよこ雲の月

一四七三 みかりせしすそのゝ雪におもなれて春の桜にきゝす鳴也

夏六首

一四七四 けふよりや山をかすみの立はなれいなはのみねの夏の曙

一四七五 山のはに月を臘の夏の雨にひとりさやけき郭公哉

一四七六 在明の月の行をなかむらし山のはかこつ時鳥かな

一四七七 羽衣のうすきにすらん夏の夜は月影よりそ秋はおほゆる

一四七八 一こゑの名残はさても有明の難面みゆるほとゝきす哉

一四七九 わきも子かやとのさゆりの露さむみかせよりさきの秋の夕
くれ

秋六首¹⁸才

一四八〇 月影もまたこん比をたのむなりいなはの山の秋の初かせ

一四八一 大方の秋とはしらてなかつともしるくもあるへき袖の露哉

一四八二 天の川雲のしからみ浪こえて露所せき秋のそて哉

一四八三 里からの秋とはことになかむとも宮もわらやも同し夕暮

一四八四 いとゝしく袖ほしかたき故郷に露をささふるあきの村雨

一四八五 誰ね覚とふ共わかぬかせの音も秋はならひの床の白露

冬六首

一四八六 山かつの冬くるからにたきすさふしはくくもる初時雨か
な

一四八七 白露も時雨もいたく故郷は軒の木末もこさまざりけり

一四八八 立田山ふゆのあらしは雲なれや木の葉の雨の五月雨のこ
ろ¹⁸ッ

一四八九 きふかもしなはもそよの秋の風み山の松の雪はふるなり

一四九〇 さ菴に衣かたしき月をのみまつの木の間そ冬もかはらぬ

一四九一 うきねもるかものつはさにける霜かさぬるからにさゆる
毛衣

一四九二 淡路かた波まの月を吹しほれうらくくふねのあとの塩かせ

一四九三 から衣きつゝ馴にしあとふりてけふそ三河のぬまの八はし

一四九四 村雨の音になれたるすまひかな月すむよはも庭の松風

一四九五 山里はみはてぬ夢もしはしこそ住なれぬれはすみうからぬ
を

一四九六 世中はあるにまかせてふるさとの袖もまかきも同し白露

一四九七 あしのやのなたの塩くむあまの袖ぬるれはとてや月もすむ
らん¹⁹才

雑六首

同月住吉三十首御会

春

一四九八 いくとせの初春風になれぬらんみてたに久し住よしの松

一四九九 さえむすふ春の池水隙もりてこほりのうへにさゝ浪そたつ

一五〇〇 つま木こる谷の北かせ吹かへてけふよりはると人にしらる

よ

一五〇一 あはち島浪におちぬるあかつきのくもらてあくる有明の月
一五〇二 八重かすみけふりもみえす成ぬ也ふしのたかねのたくれの

風空

一五〇三 わが身よにふるの山辺のやま桜うつりにけりな詠せしきに

夏

一五〇四 さゆり葉の葛城山のみねの月眺かけて影そすしき」19ウ
一五〇五 夏のよはをしかのつものつかのまにやすらふ月のあくる山

の端

一五〇六 すかはらやふしみの山の郭公木のまの月にきつゝ鳴なり

一五〇七 雨そゝきかた山をのゝさなへとき引しめ繩にかはつ鳴也

一五〇八 夏ふかき鳥羽田のいなは露落てまたほにいてぬ風渡る也

一五〇九 はのくとうきたる船のいかならん夕たつ波のあらき浦か

な

秋

一五一〇 露しけき袖をたつねて秋の来はよそにはきかし萩の上風

一五一一 たか秋の物おもふやとに吹なれてわか袖かこつ萩のうは風

一五二二 松かせに夢のうきはしと絶してたひねよふかき秋のよの月

一五二三 難波かたしほせの波を吹かせにあしのはそよく秋の夕く

れ」20オ

一五二四 なかめ行心の色の初もみちいつれの山のしくれそむらん

一五二五 峯の雲まきのお山にふくあらしふせか本やとかせうちの里

人

冬

一五一六 秋はつるうらみは今朝よイそぎりはイくす頼むよもきふ霜さえぬ

也

一五一七 山ひとのとやまの袖や時雨らんだかねのくれに雲のかゝれ

る

一五一八 御吉野のさとのね覚の床さえてけさまつしろし雪の下風

一五一九 さひしさに煙をたにのけふり行外山のしはにかせすさむ也

一五二〇 今朝きたるをのゝ里人ことゝはみやまん都のかたの雪はあざしや

一五二一 たつた山しくればそむるあとにまた紅葉ふきかへす床の風

雑」20ウ

一五二二 あらし吹しのやの月に思ふかな都もかくや夜さむなるらん

一五二三 月ゆへになれしをしのふ人やあるとやすらひかねてあくる

山のは

一五二四 いつのまにむかひの岡の小松原月もるまでに成にけるかな

一五二五 何事を思ふ人そと人とはゝなしとやいはんいかゝこたへん

一五二六 山ふかみとはぬならひをうち忘雲のはたてになかめわひつ

よ

一五二七 我かくて世に住吉のうらかせをたのむこゝろは神のまに

(一行分空白)

同三年三月日吉三十首御会

春

一五二八 春来ぬと聞つるやまのかひなれやかすみてすくる峯の松か

新吉」21オ

一五二九 ほのくくと春こそ空に来にけらし天のかく山霞たなひく

一五三〇 春はなをあさつま山をいつる日に波立そむるしかのから崎

一五三一 よしの山春そ白雲霞つゝ花咲けなるみねのいろかな

一五三二 あかつきのこれもならひのわかれそと難面みえてかへる雁
かね

一五三三 をしなへて花と雲とをさそひけりなからの山のみねの春か
せ

夏

一五三四 かた岡のもりの木陰に立ぬれてまつともしらぬほととぎす
哉

一五三五 玉かしはたま／＼はる／＼五月雨の雲まの月の影をしそおも
ふ

一五三六 ほの／＼と有明の月をまち出て山郭公ひとりなくなり

一五三七 すなはらやふしみの里に來鳴なりわか世やへつる山時鳥
21ウ

一五三八 夏の日のもりくるからに涼しきは山たのはらの杉の下かせ

一五三九 六月の一むらすくるよひの雨におほえて月のたけにける哉

秋

一五四〇 しかの浦に釣するふねの蚕の袖今朝吹かへすうらの秋かせ

一五四一 大かたのならひかさとのそでの露猶ふか草のあきの夕くれ

一五四二 物おもふたれになれたるあきかせのたゞ大方の袖にふくら
ん

一五四三 忘なん中／＼の萩のうはかせと思ひすつれと秋のゆふくれ

一五四四 足 曳の山たもる庵のとまをあらみ木の下露や袖にもるらん

一五四五 なかむれは涙しくれとふる里におもひもいれし秋のよの月
冬 22オ

一五四六 冬にいまはなるみのうらのうつせかひうつれはかはるなみ
の音哉

一五四七 新古 ふかみとりあらそひかねていかならんまなく時雨のふるの
神杉

神杉

一五四八 同 冬の夜の長きをくくる袖ぬれぬあかつきかたの四方の嵐に

一五四九 なかむれはかり田の雪にふる雁の友呼こ糸のさむき明ほの

一五五〇 冬ふかき草のはらなる霜の上にととぎひ行かせの音哉

一五五一 冬きても空たのめなるみとりかないつらときはの杜のこか
らし

雑

一五五二 神のちかひかはらぬ色を頼かなおなしみとりのからさきの
松

一五五三 よをいとふ吉野のおくの柴の慮にあかすも咲る山桜哉

一五五四 すまの関かよふ千とりもうち侘ぬいたくなふけそ有明の
月 22ウ

一五五五 新拾 さらぬたに宮古恋しき東路になかむる月のにしへゆくらん

一五五六 居敷 いにしへの人の心にゐしせきはいつれの世より跡絶にけん

一五五七 統千 見すしらぬむかしの人の恋しきは此世をなけくあまり也け
り

(注1) 実際は後二条院の百首であり、有吉保氏・田村柳巷氏「後二条院
百首」(仮称)「翻刻と紹介」(『語文』(日本大学) 第五輯・昭和五

六年六月)に翻刻・紹介されている。

(注2) 前掲論文の伝本紹介に「本来は六八丁と六九丁との間に位置すべ
き(中略)一丁が、上冊最末尾に誤綴されている」と指摘されており、
誤綴されていた時期があったようであるが、現状ではこの位置に綴じ
られている。